

で基礎編と具体編とが区分されているように見えて、その実、両種の内容がたえず交錯し、渾然と融和しているところなどは、歴史的な特定作品の文体研究という作業の特性を象徴しているようであり、また、地道で慎重な著者の学究的態度を反映している。

ただ、評者にとって、*Gawain* ないし初期英語の文学作品一般の文体の解明に、「音韻論的証拠」とともに「統語論的証拠」が寄与する面を、本書からは局部的にしか学び取ることのできなかつたのは、期待はずれであった。頭韻詩の韻律構造が形式上語の音節を要素としている以上、その文体研究は語彙と音韻を基として行なわれるべきことは当然であり、本書によってその研究方法のみごとな典型が提供されたわけではあるが、著者の主張する連続的な文脈の音声とリズムの文体的洞察に、文の統語的要素を軸とした考察が関与すべきであることも、疑いの余地がない。本書は、韻文文体の伝統と統語法の発達という課題の困難さを改めて認識させてくれる。

Marie Borroff: *Sir Gawain and the Green Knight; A Stylistic and Metrical Study*, Yale University Press, 1962.

Heinrich Böll:

Frankfurter Vorlesungen

青木 順三

ハインリヒ・ベルは、現在の西ドイツでもっとも大衆的人気を博している作家である。このベルが1963年秋から64年春にかけての冬学期にフランクフルト大学に招かれ、文学の非常勤講師としておこなった講義を収録したのが本書である（出版は66年）。フラン

クフルト大学では、現に作品を発表して活潑に活動している作家を、半年ぐらいの単位に区切って招き、講義を依頼するという試みを以前からやっているようで、詩人のパハマンやエンツェンスベルガーなどもすでにこうした機会を持ったと聞いている。日本でも同様な試みがあればおもしろいだろう。

全体は4章に分かれていて、各章がそれぞれ一回の講義である。第4章の初めで、遺憾ながらいろいろな理由から今回をもって講義を終りにしなければならなくなった、と語っているところを見ると、半年続くはずだった最初の予定を早くきりあげることになったものと思われる。一貫したテーマとして、この講義は、「現代において人間的なものが美的な可能性を持っているかどうか」という標題を持っていたらしい。この標題について、ベルは、自分が社会 (Gesellschaft) という言葉を避けたのは、今やこの言葉が流行と化しているからであり、これに反して sozial という言葉や human という言葉がとかく回避されがちで蔑視されているからこそ、むしろこの語を選んだのだと語り、これが第1章の講義の導入部となっている。第1章はいわば総論であり、第2章以下が実際の作品を引用したりしながらの各論なのだが、論の進め方はかならずしも筋道のたった論理的なものではない。彼の1963年の作品である『道化師の意見』の中で、主人公が「おれは道化師だ。瞬間を集めているんだ！」と叫ぶところが出てくるが、この講義の場合のベルにもやはり「瞬間を集めている」ような趣きがあって、個々の鋭い指摘が本書のおもしろ味であり強味である一方、全体の構成は散漫で、筋道だてて内容を伝えようとなると、はなはだしく障害を感じないわけにはいかない。聴衆である学生は、論理的学問的な分析や研究の成果を期待したのではなく、実作者としての体験に裏付けられた発言に興味を持ったの

であろうし、さらにこれが全体としてベルの文学作品に対する解説にもなっているところがおもしろかったのだらうと思われる。この点はわれわれのような読者にとっても同様であり、またもうひとつの面としては、ベルの作品が常にそうであるように、社会的政治的な批判が随所に現われている点にもかなり関心をそそられる。以下に、本書の主要な論点を紹介しよう。

アウシュヴィッツのあとではもはや詩は書けない、という「壮大な言葉」を語ったのはアドルノだが——とベルはこの言葉を「変調」させて、次のようにいう。「アウシュヴィッツのあとでは、もはや呼吸することも、食事をすることも、恋愛をすることも、本を読むこともできないのだ。——しかも、最初の息を吸い、たばこを口にくわえた人、その人は生きることを、本を読むことを、ものを書くことを、食事をすることを、恋愛をすることを決意したのである。」そして彼は、このような意味で「生き残った人間」として語っているのだ、という。しかも、現在われわれはポケットの中に原爆を抱いているために、今やこれまでとは異なった次元の時代、すなわちあらゆるものが永続性を失い、相互の関連性を失い、故郷を失い、なじみの風土を失った時代に生きている。「しかし、わたしは考えるのだが、アウシュヴィッツのあとに原爆を抱いて生き、しかも未来という言葉語るすべを学ばねばならぬとすれば、その人はどうしても足下になじみの風土を持たねばならない。しかもその人はまた、30歳になるまでの間に、カイザーの帝国と共和国と、独裁制と空位期間と、さらに最後にまた共和国を体験した人間にとっては、国家というものを信ずることはなほだ困難であることを知らねばならない。」これは1917年生まれの人ベルが、自分自身の世代的な位置とその問題と

を語っていることはいうまでもなく、彼はここに自分の文学の条件を見出しているのである。

ところで、彼は1903年から37年の間に書かれた作品を集めたあるアンソロジーについてふれながら、驚くべきことにここに集められている作家をひとりも知らない、と述べ、これはあきらかに言葉の、教養の、記憶の空隙である、と書いている。ベルはあるインタビューの中で、1945年の文学的状況について語り、当時はいわば三様の伝統があって、亡命の文学、内的亡命の文学、さらにいわゆる「血と土の文学」だったが、これが三つともどうにもならないような状態だったと述べているが、この講義で彼がふれているのも、こうした伝統との断絶感に関係があるだろう。そして考えてみると、戦後のドイツ文学には住居がなく故郷がなかった、という。作家というものは、住むことのできる土地での住むことのできる言葉を求める。「若い世代の人たちは、この国を文学においても住むことのできるようにしなければいけない。ある国に郷愁を感じるようなら、その国は人が住んでいるということであり、人が住むことができるということである。世界中のどこにでも、ドイツに郷愁を感じている人たちはたくさんいる。しかしそれはもはや存在しないドイツに対するものでしかない。……ドイツ連邦共和国に対する郷愁なんてものがあるだろうか？ もしかするとあるかもしれない。この国に郷愁を感じられるようになるのだろうか？」これが彼の提出する疑問である。

戦後のドイツ文学が、世界にも稀な経済復興の奇跡をなしたとげたドイツの真の姿を写していない、といってよく政治家が非難の声をあげるが、このことの原因は深いところにある。すなわち、「一国家を絶えず根なし草の状態に放置し、“故郷を逐われた”という言

葉を被追放者同盟（つまり東独から移住して来た人たちの組織）に占有させ、一国家を虚言によってたえず警報発令下の状態にさせておくなどということがいかに非人間的か」ということに、それはかかわっているのである。このベルの言葉は、政治的用語の虚偽をついたものであると同時に、現在の西ドイツが経済の繁栄とやらはらに、この現実の風土に根差した精神的な創造行為が行なわれていないという事実を確認し、これを何とか克服しようというベルの問題意識に基づいたものである。

一般に政治家は言葉を持たない。というよりは、彼らの言葉は何物をも語らない。たとえば“故郷を逐われた”というのもその一例だが、その他東西ドイツの「自由なる統一」というスローガンも同様である。この言葉を子供たちは毎日毎日聞かされ、しかもそれが不可能であることが折あるごとに強調される。となると、もうこれが自己偽瞞であることはどんな子供にもすぐわかる。そしてドイツの政治的将来には二つの可能性しかないことになる。そのうちひとつは不可避的であり、他のひとつはとてどもあてにはできない。すなわち、戦争が奇跡か——ということにしかならないではないか。

このような国家の状態の中では、文学に対して、本来文学にはとても引き受けきれないような重い責任が負わされてくる。何物も語らない政治、何物も語らない社会、そして幾分か途方にくれている教会——というわけで、人びとは性的、宗教的、社会的等々さまざまな問題について文学にその答を求める。たとえばベルリンの壁が建てられた時、作家たちが態度を鮮明にするようにヒステリックなまでに強要されたことをベルはここで想起している。これは栄誉ではあるかもしれないが、同時に不当な要求でもある、とベルは言う。科学も政治も教会も口に出したがらないこと

をはっきり口に出すように作家は求められる。つまり歯に衣をきせず事実を事実として述べることを求められるのだ。ところがこれが一度発言されると、途端にまるで空襲警報のサイレンのように、デマゴギーの全機関がいっせいにうなり出す、というわけである。

さて、ベルは、このように政治家や社会が文学に対して感じている不満や憤激に関連して、作家の関心はもっぱら表現にあり、形式にあり、文体にあるのであって表現された対象は彼らにとってせいぜい口実かきっかけでしかないことを強調している。すなわち文学の善し悪しの判断はもっぱらこの点にかかっているものであり、ある作家がその志向によって賞讃されるなら、そこにはごまかしが行なわれているのだ、という。こうした主張はけっして珍らしいものではないし、原則的にはなんら反対すべき余地はないかもしれないが、ベルの作品およびその評価をめぐる生じている意見の対立を頭においてこの言葉を読むと、興味が深い。つまり、ベルは自身でも、作家が政治的にアンガージュすることは当然なことだと公言しており、事実この側面は彼のどの作品にも明瞭に読みとることができる。そしてこの点については筆者もベルを高く評価するにやぶさかでないのだが、一方「審美的」見地からすると、すでに多くの評者が指摘しているように、彼の作品にはしばしば少なからぬ欠陥があることを否定するわけにはいかないからである。

ところで、この講義の標題でベルが「人間的」(human) と名付けているものは何なのかといえば、人間生活のごく日常的なものぐらいの意味のようである。衣食住、結婚、家族、友情、金銭、仕事、恋愛等々、こういうものを文学の中に描くことが今日でもなお可能かどうか、というのが当面の問題なのだ。ベルの初めの予定では、多くの実例をあげて、こうしたテーマをひとつひとつ論じていくつ

もりだったらしいが、本書の中では住居と食事のことについて二、三の作品を引用しているにすぎない。彼はまずシュティフターの『晩夏』から詳細な居居の描写を引用し、これを兵隊の塹壕生活をうたったアイヒの詩に對比する。ともに人間の住まう場所を描きながら、そこには当然おそるべき差異がある。そして現在のわれわれが読むと、シュティフターはもはやいささかパロディーじみたる響きを持つ、と書いている。だから、この調子で現在の消費経済下におけるもろもろの対象、たとえば冷蔵庫や自動車を描写することは言語的にも美的にもとても不可能だ、というのである。そこで、どんな道がわれわれに残されているか、という問題になる。

第二に、食事をテーマとしてとりあげ、ベルは、たとえばディケンズ、トルストイ、バルザック、トーマス・ウルフなどに描かれた食事の場面と、ドイツ文学に表われている同様な場面とを比較してみるとおもしろいだろうと語り、食事の様子が詳細に描写されている数少ない例のひとつとして、トーマス・マンの『ブuddenbroock』第5章をかなり長く引用している。(このあとにベルが添えている評語は非常におもしろい。すなわち、このように食事の内容や料理のコースを楽しげに数えあげることができたのには、「ハンザ都市の市民特有の自信ないし自意識——これを小説全体としては反撥しているのに——が前提となっているのかもしれない」というのである。)ベルはこれに並べて、シュティフター、ブレヒト、さらに野戦の食事をうたったアイヒの詩を引用している。これに対して、戦後の文学においては、食事は常にあわたたしいかりそめのものであり、ゆっくりと時間をかけて美味を楽しむような食事は何かおよそ縁の遠いもの、何かぞっとするようなものと感じられる、つまり政治家の世界において統計的数字によって表現されるテーマではあ

りえても、とても文学のテーマとしては成り立ちえないものと感じられる、というのである。これはベルによれば、住居とも、恋愛、結婚、家族といったすべてのテーマとも大いに関係のあることである。そこで問題は、こうした「人間的な」テーマを文学がふたたびその対象となしうするためにはどうすべきか、ということである。

ベルはここで H. G. アドラーのあまり知られてはいない短篇『Eine Reise』をとりあげている。これはナチスに逐われてイギリスに亡命したこの作家が、自分の運命を寓話的に描いた作品のようであるが、ベルが引用しているのは、この小説の中で、町の家々から廃棄されるごみとその処理の方法とがじつにことこまかに描写されている部分である。そしてこのたんとした即物的な描写が何か『不気味な』感じをあたえることを指摘する。つまりこれを読む読者は、ナチス時代にごみを処分するのとまったく同様なやり方で人間に対して行なわれた暴行と、それに対する一般民衆の反応を連想せずにはいられないのである。(ベルはここまで解説をつけているわけではないが、一読して彼の意図は明らかである。)この引用と関連させながら、ベルは彼の講義の結論めいたものを語る。それはユーモア論である。

ベルはジャン・パウルとヴィルヘルム・ブッシュのユーモア観を対比しながら、ドイツ人は在来ブッシュの考え方に偏しており、ユーモアを「高貴なもの、あるいはみずから高貴であるとうぬぼれてそのようにふるまっているものを、その竹馬から引きずりおろすこと」だと考えてきたが、これは間違いである、という。真のユーモアは一定最小限のオプティミズムと、同時に哀愁を前提とするものであり、それは上記の定義とは逆に、社会からごみと見做され、ごみとして取り扱われているものの中に高貴さを見付け出し、これを示

すことにある。ジャン・パウルのいうように、「ユーモアにとっては個々の愚行や愚者は存在しない。存在するのはただ愚かしさというもの、そして狂った世界だけである」。今の世界が狂っていることはもはや説明を要しないのであり、ドイツ人は哀愁なき嘲笑ではなく、Schadenfreude ではない笑いと喜び、すなわち真のユーモアを学ばねばならぬ、というのがベルの考えのようである。

かなり散漫と言ってもいい本書の内容を、話の順序にとらわれずに整理してみると、以上ようになる。ベルのみならず現在のドイツ文学がおかれている困難な状況は、この講義を通してかなりよく知ることができるし、ベルが混迷の中で手さぐりをしているさまもその文脈を通じて感じることができる。しかし、ベルの作品を興味をもって追ってきた筆者としては、率直に言って失望しないわけにはいかなかった。将来の文学の可能性を開く道は、ベルによれば、単にユーモアを見なおすことであり、また社会の底辺に蠢き、あるいはアウトサイダーとして社会からはじき出された人びとの中に真の人間らしさを発見することであるという。たしかにこれはベルの文学が指向している方向である。しかしこれはベルの文学の強みであると同時に、他面では、その最大の弱みもまたここにある。つまり、筆者がこの講義に対して感じた失望は、彼の文学作品に対する不満とまったく同じことなのであって、現代の文学が直面している困難な状況に対してはもっと厳しい問題設定が必要だということなのである。これは、たとえば「人間的」という言葉の解釈がベルの場合あまりにも日常的であり通俗的であることにもすでに現われている問題であろう。

Heinrich Böll: *Frankfurter Vorlesungen*. Kiepenheuer & Witsch, 1966

Robert Mauzi :

*L'idée du bonheur
au XVIII^e siècle.*

高橋安光

生半可な皮肉と受けとられても致し方はないが、献辞という代物は洋の東西を問わずいささか照れくさいものにちがいないはずだ。本書をあけたとたんに眼に入るのは著者が20名以上にのぼる恩師や先輩たちに捧げている感謝の言葉である。これを額面どおり解するならば、本書は多くの学者たちの示唆と協力によってできあがった、言ってみれば、現代フランスにおける十八世紀研究の一大成果とみなしうるような作品なのだ。しかし著者はあくまで一人であり、したがって叙述はもちろん認識および方法も個人の責任とみられなければなるまい。ただなんらかの意味合いから十八世紀研究者たちの責任の連帯を感じさせる献辞であり、事実と相違するとすれば随分と迷惑な代物になりかねないのだ。おそらくこれは私の邪推にほかならないようである。なぜならば日本フランス文学会のお偉方がモージ氏をわざわざ招待して現在各地で講演をお願いしているほどであるからだ。

著者が本書を献じているルネ・バンタールはいまをときめくソルボンヌの大御所であり、17世紀の自由思想リベラリゼーションに関する該博な研究をもって有名であるが、モージも師にならって博引傍証を骨頂とする研究者タイプである。それは良い意味でも悪い意味でもソルボンヌ実証主義派の典型と言えるであろう。豊富な資料を見せつけられて絶望感をいだく外国人研究者の存在は事実であり、可憐でさえある。もっとも救いがたいのは本場の猿真似をして